秀吉天下統一最後の相手

九戸政実（くのへまさざね）

ゆかりの地を巡る

九戸政実ガイドブック





目次

九戸政実ゆかりの地マップ …… 2
勃　興～九戸氏の進出と政実の誕生～ …… 4
「熊野舘、大名舘」（九戸村） …… 4
「長興寺」（九戸村） …… 4
「九戸神社」（九戸村） …… 5
風　雲～南部宗家との確執～ …… 6
「三戸城跡」（青森県三戸町） …… 6
「根城跡」（青森県八戸市） …… 7
■コラム「戦国の城」 …… 7
急　迫～討伐軍の進攻～ …… 8
○主要城館及び討伐軍侵攻図 …… 9
「姉帯城跡」（一戸町） …… 9
「浪打峠」（一戸町） …… 9
「一戸城跡」（一戸町） …… 10
「天下森」（九戸村） …… 10
「武内神社」（二戸市） …… 10
「軽米城跡」（軽米町） …… 11
「久慈城跡」（久慈市） …… 11
■コラム「骨は語る～九戸城の食生活～」 …… 11
死　闘～九戸城の戦い～ …… 12
○九戸城包囲の図 …… 14
「九戸城跡」（二戸市） …… 16
■コラム「九戸城の戦いは何日間あったか?」 …… 17
九戸城跡を巡る …… 18
鎮　魂～政実の最期～ …… 22
「政実公斬首の地」（宮城県栗原市） …… 22
「政実公の首塚」（九戸村） …… 22
「天ケ塚」（二戸市） …… 23
「大崩崖」（二戸市） …… 23
「岩谷観音堂」（二戸市） …… 23
「九戸古梅園」（二戸市） …… 24
「小祝の祠」（二戸市） …… 24
「亀千代惨殺の場、若宮八幡宮」（青森県田子町） …… 24
■コラム「亀千代伝説」 …… 24
博物館・資料館ガイド …… 25
九戸城ボランティアガイド …… 26
■コラム「政実にまつわる伝説の地」 …… 26
政実ゆかりの地へのアクセス …… 27
南部一族主要系図 …… 28
九戸氏関連略年表 …… 29

九戸政実ゆかりの地マップ



勃興～九戸氏の進出と政実の誕生～

九戸氏は、南部氏始祖の南部光行(みつゆき)の六男行連(ゆきつら)の末裔とされていますが、九戸神社に伝わる系図では、南北朝期に九戸村を含む所領を領知していた結城親朝(ゆうきちかとも)の総大将小笠原氏の末裔とされており、どちらが正しいか定かではありません。

九戸氏がいつから九戸郡を支配していたかは不明ですが、結城親朝が北朝に帰順したのが興国4年(1343)であり、その後九戸郡を放棄した可能性が高いので、それ以降に領主となったのではないかという説もあります。

当初、現在の九戸村を本拠としていましたが、政実の4代前の光政の時に現在の二戸市に進出し、九戸城を築城したといわれています。

政実は天文5年(1536)に生まれたと伝えられています。永禄11年(1568)には安東氏との戦いで鹿角郡を奪還し、元亀2年(1571)には不来方(現在の盛岡)の地で斯波(しば)氏を破り、弟の三男康実(やすざね)を名門斯波氏の娘婿にすることに成功します。また他の二人の弟のうち次男実親(さねちか)を南部家当主晴政(はるまさ)の次女の婿に、四男政則(まさのり)を久慈氏の娘婿とするなど、婚姻関係を通じて勢力を伸張させます。さらに天正10年(1582)には、葛西氏の勢力下にあった河崎(かんざき)城(現在の金ケ崎)に攻め込むなど勢力範囲を拡大したといわれています。

九戸政実ゆかりの地 1「熊野舘」「大名舘」(九戸村) 【MAP】D-3

九戸城(二戸市)築城前の九戸氏の本拠と伝えられています。その周囲にある伊保内舘などと共に九戸一族の城だったといわれており、天正19年(1591)の九戸城落城まで存続したと考えられています。一説では、大名舘が居館、熊野舘が軍事基地だったといわれています。



九戸政実ゆかりの地 2「長興寺」(九戸村) 【MAP】D-3



永正元年(1504)に九戸氏の招請により創建されたといわれており、かつてはこの地域一帯の文化の中心でした。また、九戸氏代々の菩提寺としても知られます。

政実の父 信仲の位牌が残されており、本尊である聖観音は、昭和34年(1959)の東北大学亀田教授の調査の結果、鎌倉末期か南北朝期のものであるとされています。

境内にある高さ32mの大イチョウは、九戸村指定の天然記念物となっており、政実が出陣の時に手植えしたものと伝えられています。

九戸政実ゆかりの地 3「九戸神社」(九戸村) 【MAP】D-3





承和9年(842)創建と伝えられる九戸地方の総鎮守で、九戸家が代々戦勝を祈願した神社として知られています。天正3年(1575)の山火事で古い資料などが焼失してしまいましたが、御神体は山火事の際、池に沈めて守られたため現在まで残されているといわれています。

神社には、天文7年(1538)の日付で「大旦那源政実」とあり、「政実」の名が記されている政実存命中当時の唯一の資料である旧羽黒神社の棟札が保存されています。

「大旦那」とは建立を命じた人、依頼主ということですが、政実は天正19年(1591)に享年56歳で亡くなったといわれていることから、逆算すると3歳か4歳で神社建立の依頼主だったということになります。その年齢で依頼主になることがあるのか、また当時は元服後に実名を付けるのが一般的だったので、その時点で「政実」という名前があったのかなど謎が尽きません。

高橋克彦「天を衝く」



二戸市民文士劇「天を衝く」～「鹿角の城」の場～

「南部はもはや源氏ではありませぬ。」実親は断言した。「陸奥の民にござりましょう」「陸奥の民?」政実は困惑の顔で実親を見やった。「兄者が源氏に戻りたいお気持ちは十分に分かり申すが、この土地に四百年も根付いた我らがいまだに源氏の心を抱いていては国を纏めることなどできますまい。将軍が我らに国替えを命じてきたらいかがなされます?」「さて･･･それは」「都に戻れと言われても兄者は従わぬはず。生まれ育った故郷ではありませぬか。山や川を眺めて心が和みまする。先祖はいざ知らず、今の我らは陸奥の民となりました」「なるほど、陸奥の民か」政実は何度も首を縦に振って、「安東や大浦が蝦夷なら、我らとて新しき蝦夷と言うことだな」力を得たような笑いを浮かべた。「陸奥の地に根付く者、すなわち蝦夷だ」政実はその言い方が気に入ったらしかった。
(高橋克彦「天を衝く」(北の鬼)より)

風雲 ～南部宗家との確執～

本能寺の変のあった天正10年(1582)、南部家24代当主晴政が死去、後継者である幼少の第25代晴継(はるつぐ)が急死(暗殺とも言われている)したことにより、南部家の後継者問題で紛糾。後継者を決める合議の場では、先々代当主晴政の長女の婿である田子信直(のぶなお)と、同じく次女の婿である九戸実親のどちらを当主にするかで紛糾しますが、北信愛(きたのぶちか)によって第26代当主は信直と半ば強引に決定されたことから、九戸氏と南部氏との確執が深まります。

天下統一を進める秀吉は、天正15年(1587)に奥羽の諸大名にも惣無事令(私戦禁止令)を伝達。その違反を理由とした恣意的な改易・没収や、没収地域に対する過酷な検地や刀狩などを推し進めます。そのため、奥羽全域で在地領主のみならず百姓をも巻き込んだ一揆(盟約、抵抗運動)が結成され、豊臣政権と鋭く対立するようになります。天正18年(1590)、小田原の北条氏を滅ぼした豊臣秀吉は、小田原に参陣しなかった在地領主を制圧する奥州仕置を実施。大崎氏、葛西氏、黒川氏などを滅ぼします。

同年7月、これまで有力領主の盟主的存在だった南部信直が、秀吉から「南部内七郡」の朱印状を受け、他の領主は信直の家臣という扱いとなります。

信直は検地の実施と秀吉直轄地の設定、家臣の諸城破却とその妻子の三戸召置を命じられますが、九戸城の規模が三戸城を遥かに凌ぐこと一つとっても、信直の独力でなせる業ではありませんでした。

そのような中、奥羽の他の地域では豊臣軍に向けられた抵抗の矛先が、北奥では秀吉の代理人と見なされた信直に向けられることになり、政実は信直との対立関係から否応なく反豊臣一揆の指導者となります。

九戸政実ゆかりの地 4 「三戸城跡」(青森市三戸郡三戸町：令和4年国史跡指定) 【MAP】C-1



三戸町のほぼ中央に位置する山城で、福岡城(九戸城から改称)に本拠を移すまでの南部宗家の居城でした。

南部家24代南部晴政の代の天文8年(1539)に、本拠地であった聖寿寺館(南部町本三戸城:平成16年国史跡指定)が家臣の放火により焼失したため、この地に築城したといわれています。



現在は城山公園として整備され、昭和42年(1967)に模擬天守が築かれ「温故館」の名で歴史資料館となっているほか、平成元年(1989)には山麓に綱御門が復元されています。

九戸政実ゆかりの地 5 「根城(ねじょう)跡」(青森県八戸市：昭和16年国史跡指定)





南北朝期に北畠顕家(あきいえ)が陸奥守として陸奥国府に赴任した際、これに従い糠部郡(ぬかのぶぐん、現在の岩手県北部と青森県東部)国代として奥州に下向した南部師行(もろゆき)が建武元年(1334)に築城した城です。

南部家初代光行の三男(六男説もあり)実長(さねなが)の流れを汲む八戸南部家は、奥州における南朝側の中心的存在でしたが、南北朝合一により劣勢となり、やがて北朝に帰順。同じ一族の三戸南部家が優勢となります。

第26代南部信直が秀吉から所領安堵の朱印状を受けたためその配下に入り、寛永4年(1627)の遠野移封により廃城になりました。

昭和53年(1978)から発掘調査及び整備事業が進められ、主要部分は「史跡 根城の広場」として公園化されています。発掘調査の成果をもとに、本丸跡地には16世紀当時の姿で本殿・工房・板蔵・納屋・馬屋などが復原されており、建物内部では、武運長久を祈る正月十一日の儀式の様子や様々な道具類が再現されております。

なお、寛文4年(1664)に幕府の命で南部藩から分かれて成立した八戸藩は、現在の八戸市役所近くにある八戸城に本拠を構えています。

コラム 戦国の城



通常私たちが「お城」と聞いて思い浮かべるのは、白亜の天守閣、高い石垣、広い水堀・・・ですが、そのような城が築かれるようになったのは、ほとんどが近世以降です。

戦国時代の城は、小高い丘陵や山岳に棚田のように配置した曲輪(くるわ／城郭内の小区画)の上に築かれ、掘立柱の小屋や物見櫓などを配置。周囲には堀を穿ち、その内側に土を盛って土塁とし、出入り口である虎口(こぐち)に城門を建てる程度のものだったと考えられています。八戸市の「史跡根城の広場」では、そのような中世の城の姿に思いを馳せることができます。

急迫～討伐軍の進攻～

天正19年(1591)、三戸城での年賀の挨拶に政実は欠席し、南部宗家氏との対立が決定的となります。

2月には、九戸、櫛引、七戸、久慈、大里、大湯の各氏に旧和賀、稗貫の浪人を加えた九戸勢が蜂起します。

3月になると政実と信直は本格的な戦闘状態となり、政実は三戸城を取り囲む伝法寺城、苫米地城、又重城等を攻撃し、激しい攻防が繰り広げられました。劣勢に立たされた信直は秀吉に援軍を要請します。

信直から書状を受け取った浅野長政は、当地の様子を「当郡の侍衆逆意あり、糠部中錯乱の事に候。南部殿天下に御奉公候を、当地の衆、何れも京儀嫌い申され、かくの如き姿に候」と書き記しています。

ここに、広大な一揆地帯の制圧と伊達氏の完全屈服を目的として、総大将 豊臣秀次、討手大将 蒲生氏郷(がもううじさと)、軍監 浅野長政、武者奉行 堀尾吉晴、家康名代 井伊直政らの武将による兵力3万5千からなる奥州再仕置軍が編成されます。

7月末には蒲生氏郷は会津を出発、8月6日に豊臣秀次、徳川家康が二本松に到着します。



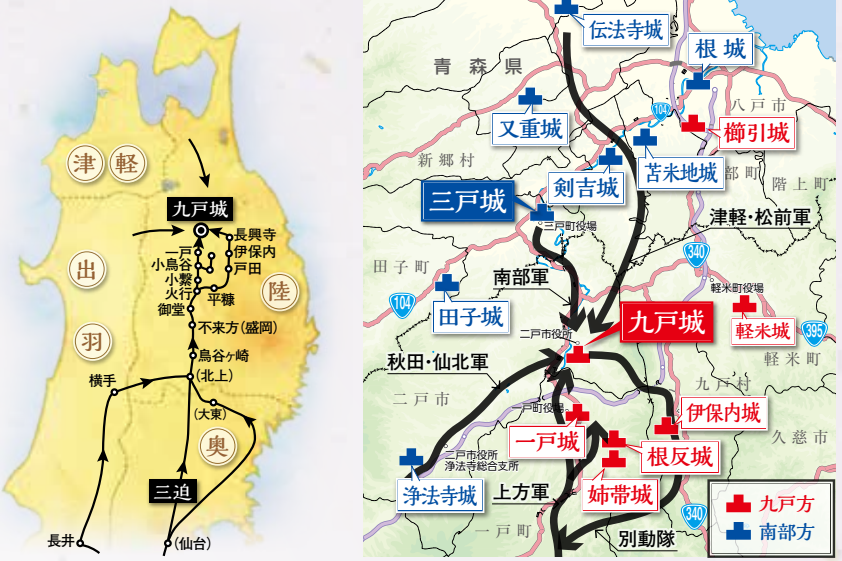
「紙人形で九戸城を再現する会」作成の和紙人形
～討伐軍の進軍～

同じく秀吉の命を受け、出羽方面から小野寺義道(よしみち)、秋田実季(さねすえ)、仁賀保勝利(にかほかつとし)らが出陣。津軽方面から津軽為信(ためのぶ)、松前慶広(よしひろ)が南下。

ここに、上方軍と奥州諸将の軍、合わせて約6万5千の大軍が九戸城に向けて進軍を開始します。

9月1日には九戸城の前哨基地というべき姉帯城、根反城で激しい戦いが繰り返されます。姉帯城に立てこもった姉帯兼興(かねおき)、兼信(かねのぶ)兄弟は、城を出て大軍の中に駆け入り奮戦するも、弟兼信は敵と刺し違えて討ち死に。兄の兼興も無数の傷を負い、もはやこれまでと馬上で腹を切り自害。姉帯城も落城したと軍記物には記されています。

九戸の乱に関連する主要城館及び討伐軍侵攻図



九戸政実ゆかりの地 6「姉帯城跡」(一戸町) 【MAP】C-3





南部氏の一族である姉帯氏の居館で、馬淵川北側約50mの断崖上に築かれた典型的な山城です。

天正19年(1591)、九戸城攻略の前哨戦となる姉帯城の戦いでは、上方勢との激戦の末、姉帯兼興、兼信兄弟が壮絶な最期を遂げ姉帯城も落城しました。

東西二つの曲輪から構成され、西の曲輪は公園として整備され、案内板が設置されているほか、高さ2.7mの土塁が残されています。また、発掘調査では古銭、鎧、矢じり、茶道具などが出土しています。また、墓と思われる穴から和鏡3枚が出土しております。(御所野縄文博物館所蔵)

九戸政実ゆかりの地 7「浪打峠」(一戸町) 【MAP】C-3





険阻な地形を利用し、九戸勢が上方勢の進軍を阻止するため2,000の兵で待ち伏せていましたが、北信愛の進言により、上方軍が鳥越観音前から大崩崖を越える道を通ったため、なすすべもなく引き返したと伝えられる場所です。ただし、当時この道があったことを疑問視する説もあります。

旧奥州街道が藩政時代のまま残されており、道の両側には浪打峠一里塚が完全な姿で残っています。また、天然記念物の交叉層（こうさそう）が美しい姿をみせており、藩政時代後期の紀行家、菅江真澄（すがえますみ）の紀行文などにも紹介されています。

九戸政実ゆかりの地 8「一戸城跡」（一戸町） 【MAP】C-3





南部氏の一族である一戸氏の居城で、馬淵川東側の約30mの河岸段丘上に築かれた平山城です。

一族の内紛で一戸氏が滅亡した後は、九戸政実の腹心一戸図書が入りましたが、南部信直が攻め落とし、北秀愛（ひでちか）の居城となりました。九戸の乱では、奪還を図った九戸勢を北秀愛が重傷を負いながら守り通したといわれています（内通により落城したとの説も）。

資料が乏しく、最後の戦いについてはよく分かっていませんが、討伐軍によって攻め落とされたと考えられています。

国道4号線に分断される形で南北4つの曲輪から構成されており、昭和63年（1988）に出土した馬の焼印は、中世糠部の馬産を考える上で唯一の資料と言われています。（御所野縄文博物館所蔵）

北舘は公園として整備されており、一画には町の水道施設が設置されています。

九戸政実ゆかりの地 9「天下森」（九戸村） 【MAP】D-3



「道の駅おりつめ」にほど近い場所にある丘陵です。九戸の乱の際、本隊と分かれた蒲生将監の別働隊が、一戸町小繋の火行（ひぎょう）から平糠（ひらぬか）、戸田（とだ）を通って伊保内（いぼない）の諸城を攻略し、この場所に野営したことから天下森と呼ばれるようになったといわれています。

九戸政実ゆかりの地 10「武内神社」（二戸市） 【MAP】C-2





南部信直が堀野に陣を取ったとき、戦勝を祈願したと言われており、九戸の乱終結後に自筆の証書を書き所領を寄贈したと伝えられています。

仁徳18年（330）に創建され、大同2年（807）に坂上田村麻呂が再建したと伝えられています。祭神は武内宿禰（たけのうちのすくね）、神功（じんぐう）皇后、応神天皇です。

九戸政実ゆかりの地 11「軽米城跡」（軽米町） 【MAP】D-2



築城時期は不明ですが、在地領主から発生したと思われる軽米氏の居城で、雪谷川（ゆきやがわ）西側約10mの丘陵に築かれた平山城です。

九戸の乱の際には軽米兵右衛門が九戸方に与したため乱後没落し、北信愛の三男愛継（ちかつぐ）の居城となりました。

やがて、寛文5年（1665）の八戸藩の創設により北氏が鹿角大湯に転封となり、以後八戸藩の軽米通代官所が置かれました。現在は一部が軽米町役場の敷地となっています。

九戸政実ゆかりの地 12「久慈城跡」（久慈市）





三代に亘る姻戚関係を通じて九戸氏と親密な関係にあった久慈氏の居城で、平野を一望する40mの丘陵上に築かれた平山城です。

九戸政実の弟政則（まさのり）が久慈家の娘婿になっており、九戸一揆には舅の直治（なおはる）と共に政則も九戸城に籠城。落城後は久慈父子も政実と共に栗原郡三ノ迫（さんのはざま）で斬首されました。

久慈城周辺は戦場にはなりませんでしたが、久慈氏の嫡系が滅亡し、天正20年（1592）、久慈城も取り壊されました。

コラム 骨は語る　～九戸城の食生活～

九戸城でどのようなものを食べていたかについて、生化学の発達により、古い人骨のコラーゲン組成から生前の食生活が推定できるようになりました。

九戸城二ノ丸跡から出土した人骨を分析した結果、海産物と穀類とを組み合わせた食生活を送っており、海産物に由来するタンパク質は多くても30%程度と推定されました。

二戸地方では、後世においても稗・粟などの雑穀が主食となっており、海産物も馬淵川を遡上した鮭は高価だったことから、ウグイなどの淡水魚と稗・粟などの雑穀を組み合わせた食生活を送っていたのではないかと推測されます。（百々幸雄他「骨が語る奥州戦国九戸落城」）

死闘 ～九戸城の戦い～


※1

天正19年(1591)9月2日には、上方勢を中心とする討伐軍は政実率いる5千の兵で籠城する九戸城を完全に包囲します。

九戸城の戦いに関する一次資料は、天正 19 年 (1591) 9月14日付け浅野長吉(長政)の書状のみとされており、それには次のように記されています。「去る1日、姉帯・根反という2城をただちに攻めかけて陥落させた。このため、小さな城砦などの兵たちは退却して九戸城に立て籠もった。そこで2日からこれを攻囲し、堀ぎわまで攻め寄せたところ、九戸(政実)が髪をそって降参したので、これを妻子ともども秀次の陣所へ送り届け進上した。その他の『悪徒人共』はすべて首をはね、首数150余りを持たせて秀次に進上した。」(解釈文は、百々幸雄他「骨が語る奥州戦国九戸落城」竹間芳明執筆分による。)


※2

一方、後世に書かれた軍記物には次のように記されています(諸本により内容に異同あり)。

◆◇討伐軍の宣戦布告に対し、九戸方が一斉射撃。数に物を言わせて押し寄せる敵に対し大損害を与える。

◆◇九戸方の鉄砲の名手工藤右馬助業綱(くどううまのすけなりつな、兼綱とも)が、討伐軍の差し出した唐傘の嶋(傘頭部の骨のまとめ部分)をみごと打ち砕き、敵味方から大喝采を浴びる。

◆◇蒲生氏郷の甥、氏綱(うじつな)の夭折(ようせつ／若死にすること)による様子の変化に気付いた政実が蒲生陣に夜襲をかけ、大損害を与える。

◆◇夜襲に対する報復があると見た政実は、堀や深田に米糠を撒いて陸地に見せかけ、おとりに誘き寄せられた討伐軍をそこに追い込み、鉄砲隊の攻撃で大損害を与える。(ハタフク戦法・・・現在の九戸村にある幡幅川に由来)

◆◇猫渕川(ねこぶちがわ)をせき止めた水堀の堤防が、信直の進言により切り崩されて決壊。政実は城内の水不足を悟られないよう、馬300頭を並べ、白米を体にかけて水に見せかけたため、討伐軍はそれを見て、これ以上の水攻めは無駄と考えて水攻めを中止した。

◆◇業を煮やした蒲生氏郷は、九戸城への総攻撃をかけるが、土塁を利用した九戸方の射撃などにより大損害を蒙る。

※1「紙人形で九戸城を再現する会」作成の和紙人形～九戸城の攻防　※2、３二戸市民文士劇「天を衝く」～「鹿角の城」「九戸城」の場～

地方の小城と侮っていた九戸城がなかなか落城せず、冬も近付き(旧暦9月2日は現在の10月中旬)、また兵糧も残り少なくなってきました。そのため焦燥に駆られた討伐軍は、九戸氏の菩提寺である長興寺の薩天(さってん)和尚を仲介として、「政実の降伏と引き換えに城兵の命を救う」という偽りの和議を申し入れました。

この和議に対して謀略ではないかと反対する者もありましたが、一人でも多くの城兵を救おうという思いから、政実は討伐軍に投降します。

弟の実親は、謀略であると反対し、降伏するよりは敵の武将を一人でも多く切り倒して討ち死にするべきと主張して本丸に立てこもりました。そして討伐軍からの再三にわたる城の明け渡し要求にも応じず、立てこもった兵共々討ち死にしたといわれています。

その後上方軍は開門した城内になだれ込んで火を放ち、城内にいた者は二ノ丸に押し込まれ、女、子供を問わず撫で斬りにされたと伝えられています。

他の奥羽の城と同様、落城後の九戸城は上方勢により近世城郭として改修を施された上で信直に引き渡され、「福岡城」と名を改められました。

高橋克彦「天を衝く」②


※3

「これから先、敵の二万を殺すより、手前に尽くしてくれた五千を生かすことの方が大事。自明の理にござろう。そこまで間抜けではないつもり。せっかくの申し出。ここはありがたく受けるのが正しき道。いかにも十万の援軍が来てからでは和議など有り得ぬこと」「首を差し出せという和議も理不尽。理不尽とは思うたが…この通りじゃ。許せ」薩天は政実の前に両手を揃えた。…中略…

「天を衝いて雷雨を呼び寄せようと思っており申したが…秀吉という天はなかなかしぶとい。小雨程度しか降ってくれ申さぬ」「まだ答えを出すのは早かろう。そのうち激しい雨となるやも知れぬ。そなたがすべてをやり遂げることでもなかろう。だれが食うかも知れぬ稲を百姓らは育てておる。仏が割り振りしてくだされた役目と思えばよい」「和尚こそ立派な和尚にござる。そう言われると今にでも腹を切りたくなってきた。引導を渡すのがお上手だ」「ま、これが商売じゃでな」二人は声にして笑った。互いの立場を思えば不思議な笑いでもあった。(高橋克彦「天を衝く」(大喧嘩)より)

九戸城包囲の図

6万5千の大軍が九戸城を完全包囲して威圧する！



包囲軍の配置には諸説あるが、一般に信頼されている図によった。

※現在の本丸・二ノ丸などの曲輪名称は、落城後に築かれた福岡城に伴うもので、九戸城時代の曲輪は不明です。

九戸城跡から見たパノラマ風景



九戸政実ゆかりの地 13「九戸城跡」（二戸市） 【MAP】C-2





二戸市の中心部にある九戸城は、馬淵川(まべちがわ)と白鳥川(しらとりがわ)の合流点、古代からの交通の要衝に位置する平山城で、面積約36万㎡、東京ドーム約10個分の広さがあります。

西に馬淵川、北に白鳥川、東に猫渕川（ねこぶちがわ）が位置し、西側と北側は30m程の切り立った断崖となっている天然の要害とも言える城館です。

築城時期は明確ではありませんが、当時金田一にあった実相寺(現在は一戸町)の由来書などから、政実から4代前の光政の代(明応年間 1492～1501)ではないかと考えられています。

本丸、二ノ丸を中心に若狭舘、石沢舘、三ノ丸、松ノ丸の曲輪（くるわ／城郭内の小区画）で形成されています。

自然地形を活かした曲線主体の曲輪でしたが、落城後、蒲生氏郷により本丸、二ノ丸を中心に再普請が施されたことから、近世的な矩形・直線の曲輪である本丸・二ノ丸エリアと、九戸城時代の面影を残す石沢舘・若狭舘エリアが混在する、二重構造の城郭となっています。

石垣普請は、翌年に決定していた朝鮮出兵の現地築城の練習のため、経験のない東国武将達に工事をさせた可能性もあります。

南部信直は「福岡城」と名を改め、南部の本城としましたが、寛永10年（1633）、その孫の第28代重直（しげなお）が盛岡城（不来方城）に本拠を移したことから、同13年（1636）福岡城は廃城となりました。

幕末期には九戸城の相当部分は藩から当地域の豪商である國分屋に払い下げられていたらしく、本丸追手門の脇に國分屋の祠が残っています。明治26年（1893）には、後に岩手県初の民選知事となる國分謙吉氏が本家から九戸城跡地を借り受け、私立國分農事試験場を設立しています。

南部氏が盛岡に移った後、地元では九戸氏への強い思いから「九戸城」と呼んでいたようです。昭和10年（1935）6月に、豊臣秀吉全国統一最後の合戦の場として、盛岡城よりも2年早く国の史跡に指定されており、その際にも「九戸城跡」として指定を受けています。

史跡指定当時は、本丸の大部分が農地となっており、二ノ丸の約半分は國分氏の宅地でしたが、公有地化が進められ、平成元年（1989）から史跡環境整備事業による調査が実施されています。

本丸からは、石垣を含めて落城後に改修された福岡城の遺構を中心に検出されました。一方、二ノ丸からは、古い時期の堀跡や九戸城時代の工房跡と思われる竪穴群が検出され、漆の付着した貝殻や漆に金泥を塗り込めた豪華なよろいの札（さね）などが出土しました。

二ノ丸大手門近くでは、平成7年（1995）のトイレ設置工事に先行する発掘の際、九戸城落城直後に掘られたと思われる粗末な墓穴から首のない人骨十数体分が発見されました。これらには無数の殺傷傷や刺突傷があり、伝承や軍談記にある撫で斬りの犠牲者と考えられています。


現在も続く発掘調査

ほとんどが農地であった九戸城跡からは、耕作中に多くの人骨が出土しており、搦手門（からめてもん）脇の通称「首塚」はその人骨を埋葬した場所です。

ただ、皆殺しにされたにしては数が少ないことから、本当に軍記物にあるように女子供を含む篭城者全員の「撫で斬り」があったかどうかについては、今後の発掘調査の成果が待たれます。

コラム 九戸城の戦いは何日間あったか?

12ページで紹介した天正19年（1591）9月14日付け浅野長吉（長政）書状には「九戸へ楯篭候之處を、去二日より執巻、早や堀際まで仕寄候處に、九戸髪をそり走入申付」とあり、あたかも討伐軍の威容を恐れてすぐに降伏したような記述になっています。多くの史書にあるとおり落城日を9月4日とすると、戦闘は2、3日程度だったということになります。『二戸市史』でも「戦いはわずかに2、3日間」としています。

一方、後世に書かれた軍記物では、8月25日攻撃開始、9月4日落城の10日間程度としているものが多く、中には包囲から落城まで約20日間を要したというものもあります。

豊臣方の武将にとって「九戸城のような地方の城を攻めあぐんだ」という記録を残したくないため、「上方軍の威容を見て戦わずして屈服した」というストーリーにしたのではないかという説もあります。

九戸城跡を巡る



九戸城跡俯瞰図

①「大手門跡」

九戸城の西南角に二ノ丸に通じる大手門がありました。長年の開発により、現在は門の遺構は残っていません。向かって右（東側）は深い沼沢地（しょうたくち）だったと考えられ、ここを突破して対岸の崖に取り付くのは難しかったと思われます。



②「本丸」



九戸城落城後に蒲生氏郷により約100m四方の矩形・直線の近世的な郭に改修されています。

土塁両面の石垣は東北最古と言われており、会津若松城の天守部分に残存する天正期の石垣との類似性などから、蒲生氏郷による普請で、穴太衆（あのうしゅう）という足軽も兼ねた石垣構築専門集団がいたと考えられています。





本丸と二ノ丸を結ぶ入口は2か所あり、いずれも敵の侵入を防ぐため桝形と言われるクランク状の屈曲となっており、ここに侵入した敵は正面と左右からの攻撃に晒されることになります。

本丸虎口は堀が途切れる場所にあり、二ノ丸と直接出入りできる形になっています。ここには門などの堅固な建造物があったと思われ、平成2年度（1990）の発掘調査では礎石の一部が確認されています。

本丸追手門は空堀で二ノ丸と隔てられた場所にあり、木橋が架かっていたと思われます。

平成元年から始まった発掘調査では、断面から焼土、木炭、燃えた生活遺物、火縄銃弾丸などの戦禍の痕跡が見つかりましたが、期待された礎石建ちの主要な建物は、長年の耕作によって一部を除いて残っていませんでした。



本丸と二ノ丸間の堀

③「二ノ丸」

本丸同様、落城後に改修されたと考えられていますが、北東部からは竪穴式の製鉄・漆関係の工房や大型の建物が立ち並んでいた遺構が見つかっています。また、現在トイレのある周辺からは、墓穴から十数体の首のない人骨が見つかっております。

二ノ丸と石沢舘・若狭舘を結ぶ場所には二ノ丸搦手門があります。これは、石沢舘前の堀の底の道を通り、白鳥川を渡って九戸へ向かう街道に向かう通用門だったと思われます。



❹「石沢舘（外舘（とだて））」

二ノ丸の搦手の東方、東を猫渕川と接する場所に位置しており、九戸城時代の姿を残していると言われています。調査区中央付近の焼土と周辺の竪穴状遺構検出面から、坩堝や溶解物といった鍛冶に関係する遺物が出土しています。また、令和6・7年度の発掘調査によって、新たに石垣が発見され、福岡城時代にも利用されていたことがわかりました。



❺「若狭舘」

二ノ丸の東方、堀を挟んだ場所にあり、九戸城時代の姿を残しているといわれています。

どのような建物があったかは不明ですが、軍事的な施設だったのではないかと思われます。耕作の際に人骨や工房のあったことを示す吹子（ふいご）の羽口（送風管）等が出土しています。なお、「石沢」「若狭」は、家臣の名に由来する可能性もあります。







←　→
二ノ丸搦手門から見た石沢・若狭舘。侵入した敵は正面、左右からの攻撃に晒される。

❻「三ノ丸」

藩政時代は福岡代官所の蔵があり、終戦前までは城ノ外（しろのそと）と呼ばれていました。現在は二戸市中心部の五日町となっています。

❼「松ノ丸」

福岡城に本拠を移した信直が居所としていたと言い伝えられています。確かなことは分かっていませんが、武家屋敷があった在府小路側に大手門跡があることから、居所があった可能性が高かったと思われます。

かつて地元の人は、松ノ丸跡を「福岡城跡」、それ以外の部分を「九戸城跡」と呼んでいたと言われています。福岡城廃城後も隣接する呑香稲荷（とんこういなり）神社には代々の南部藩主が参詣しており、松ノ丸に御仮屋（藩主の宿泊所）があったためと思われます。現在は市街化が進んでいます。

❽「在府小路」

九戸城の南側に位置する、福岡城時代の武家屋敷跡で、九戸城時代は曲輪の一つだった可能性があります。

大手門前に石積みの側溝を伴う道路が見つかっています。

また、道路の両側に長屋のような屋敷が立ち並んでいたことも分かっています。



❾「九戸城戦没者供養塔（通称：首塚）」

九戸城跡が農地として利用されていた頃、耕作の際に出土した人骨を埋葬した塚であり、昭和40年（1965）に供養塔が建てられています。「首塚」と言われていますが、恐らくは出土した様々な部位の人骨が埋葬されていると思われます。



❿「土井晩翠（どいばんすい）の歌碑」

昭和14年（1939）10月4日、土井晩翠が旧制福岡中学校に講演に来訪した折、御返地のリンゴ園で遊び、九戸城跡にも足を運びました。九戸城の悲劇を聞き、宿で書き記したことを記念した「荒城の月」の書を刻んだ碑です。

なお、荒城の月の碑は、九戸城のほか、大分県竹田市、会津若松市、仙台市の全国4か所にあります。



鎮魂 ～政実の最期～

捕えられた政実ら武将は、総大将豊臣秀次の本陣のある栗原郡三ノ迫（現宮城県栗原市）に送られ、そこで斬首されます。政実は享年56歳であったと伝えられています。

三ノ迫で斬首された武将は、南部根元記によれば、九戸政実、櫛引清長、櫛引清正、七戸家国、久慈直治、久慈政則、大里修理亮、大湯昌次の8名とされています（資料により異同あり）。

政実の首は秀吉のもとに届けられ、最後は千利休同様に京都の戻橋に晒されたともいわれています。

一方で、斬首された政実の首は家臣が密かに地元まで持ち帰り、九戸神社近くの山中に埋めたとも伝えられています。

九戸政実ゆかりの地 14「政実公斬首の地」（宮城県栗原市）





連行された政実ら一行が斬首された場所といわれています。

明治初期、地域に住む人の夢に政実の霊が現れたため、草むらを探したところ遺骸を埋めた塚が発見されました。その供養のために九ノ戸（くのへ）神社を建立したといわれています。また、近くには首級清めの池とされている池もあります。

九戸政実ゆかりの地 15「政実公の首塚」（九戸村）【MAP】D-3



三ノ迫（宮城県栗原市）で斬首となった政実の首級を、乞食に姿を変えた家臣の佐藤外記が夜陰に紛れて持ち帰り、葬ったと伝えられる場所です。





九戸政実ゆかりの地 16「天ケ塚（てんかつか）」（二戸市）【MAP】C-2



上方勢の戦死者を埋葬した場所と伝えられており、秀吉が天下様と言われていたことからその名が付いたといわれています。なぜこのような山の中にと思われますが、当時は奥州街道の支線に当たっていたといわれています。

現在は3戸の集落となっており、集落の奥には廃屋となった印象的な南部曲り家が残っています。

九戸政実ゆかりの地 17「大崩崖（おおほうがけ）」（二戸市）【MAP】C-2





馬淵川に面した断崖絶壁の丘陵です。九戸城を包囲中に蒲生氏郷の甥、氏綱が急病にかかり病死したため、悲嘆にくれた氏郷が馬蹄に踏み荒らされないよう埋葬した場所と言い伝えられております。

九戸政実ゆかりの地 18「岩谷（いわや）観音堂」（二戸市）【MAP】C-2



城の北西隅、白鳥川と馬淵川の合流点を望む断崖に造営された堂宇です。

正徳2年（1712）、現在の二戸大橋下にあった龍岩寺に、九戸一揆の戦没者を追悼するため「千補陀堂」（せんほだどう）が建立され、千体仏が奉納されましたが、天保6年（1835）の「白髭水」と呼ばれる大洪水で流出。その際水没した千補陀堂の奉納碑が後に引き上げられ、岩谷観音の境内に安置されています。

高橋克彦「天を衝く」③

「政実よ、またここへ戻って来たの」薩天は塚に向かって声をかけた。「おまえは馬鹿者じゃったが、儂（わし）も大馬鹿者。すっかり狐どもらに化かされた。なれど本当の馬鹿者はあやつらじゃ。もはや互いになにも言うまい。馬鹿を相手にしたとて、ただくたびれるばかり。おまえはあの世で九戸党を率いて新しき国を作れ。怒らずに儂の居場所も用意しておけよ。政実、聞こえたか」薩天は塚をじっと見詰めた。

そのとき、風がどっと吹いて木々を揺らした。薩天は何度も頷いた。（高橋克彦「天を衝く」（満開）より）



※二戸市民文士劇「天を衝く」～「九戸の山中」の場～

九戸政実ゆかりの地 19「九戸古梅園」(二戸市)　【MAP】C-2

政実遺愛の梅園と伝えられていますが、一説では政実の姫が逃れるところを敵に見つかり自害した折、侍女に形見の木として植えさせたともいわれております。現在、六弁の梅(ろくぶのうめ)が咲く老梅が残っています。





九戸政実ゆかりの地 20「小祝(こいわい)の祠」(二戸市)　【MAP】C-3

張り出した岩の岩陰に小さな祠が3つ並んでいます。山の神ともいわれますが、地元では政実の姫を祀った祠と伝えられています。





九戸政実ゆかりの地 21「亀千代斬殺の場、若宮八幡宮」(青森県三戸郡田子町)　【MAP】A-2

九戸城落城時13歳と伝えられる政実の一子亀千代については、斬殺説、生存説がともに伝えられておりますが、この若宮八幡宮では斬殺された亀千代を祭神として祀っており、近くには斬殺の場とされている場も残っています。



コラム 亀千代伝説

政実の一子亀千代については、浅野長吉(長政)の書状では、妻子ともに三ノ迫に連行されたとされており、「九戸軍記」ではそこで殺害されたとされております。

一方で、現地で母と共に殺された(南部根元記)、南部家の家臣に捕らえられ三戸郡石亀村亀ヶ崎で殺害された(田子家文書)、政実の腹心佐藤外記に護られて鹿角に逃れる途中で追っ手が迫り自害した(佐藤家に残る記録)など様々な説があります。

亀千代生存説もあり、徳川家康に3,000石で召し抱えられ堀野三右衛門と名乗った(九戸戦記)、気仙に落ち延び、多田姓を名乗って伊達家に使えた(奥州南部九戸軍記)など様々な説があります。

また、亀千代のほかに「市左衛門」という子もおり、落城後、津軽為信に御馬廻役として知行400石で召し抱えられ、幕末まで存続していたという説もあります。ほかに一戸氏との合戦で「次男弾正」が討ち取られたという記録も残っています。そのため、累が及ぶことを恐れて一子だけとした可能性も考えられます。

[博物館・資料館ガイド]

「二戸市埋蔵文化財センター」(二戸市)　【MAP】C-2

九戸城の工房跡から発掘された、漆の付着した貝殻や漆に金泥を塗り込めた豪華なよろいの札(さね)、その工房の復元模型などが展示されています。また、発掘調査の試掘トレンチの断面も展示されており、再普請による土盛りの状況などを見ることができます。

【開館時間】9:00～17:00
(入館は16:30まで)
【休館日】月曜日(祝日の場合は翌日)、祝日の翌日(土日を除く)、12/29～1/3
【入館料】一般50円、小中学生20円
【TEL】0195-23-8020　※R8.4.1現在





「二戸歴史民俗資料館」(二戸市)　【MAP】C-2

戦国時代に下剋上で南部から独立した津軽。二つの藩の仲違いが続いた後、幕末期に津軽藩主襲撃未遂事件を起こした相馬大作の資料等を展示。また、国内最古の酒の自動販売機や会輔社や会輔社から輩出の偉人達の資料も展示されています。

【開館時間】9:00～16:30
【休館日】月曜日(祝日の場合は翌日)、祝日の翌日(土日を除く)、年末年始
【入館料】一般50円、小中学生20円
【TEL】0195-23-9120　※R8.4.1現在





「御所野縄文博物館」(一戸町)　【MAP】C-3

2021年に世界遺産登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産である御所野遺跡内にある博物館で、一戸城、姉帯城などからの出土品が展示されています。

【開館時間】9:00～17:00(入館は16:30まで)
【休館日】月曜日(祝日の場合は翌日)、祝日の翌日(土日を除く)、12/29～1/3
【入館料】一般300円、大学生200円、高校生以下無料
【TEL】0195-32-2652　※R8.4.1現在





［九戸城ガイド］





4月6日（城の日）から11月30日までの期間、一週間前までのご予約で九戸城ガイドが城内を一緒に巡ってご案内をいたします。ガイド時間は約1時間30分程度です。

また九戸城跡ガイドハウス内には、九戸城に関する説明を展示しております。

ガイド対応時間：午前10時～午後3時まで

連絡先：一般社団法人二戸市観光ツーリズム協会

【TEL】0195-23-3641【FAX】050-3397-1568

コラム 政実にまつわる伝説の地

○佐々木ケ池（二戸市）





天正16年（1588）、政実は勢力拡大のため佐々木舘に夜襲をかけ、城主佐々木数馬秀綱は討死。その娘、16歳の夕姫（北姫とも）が敵に辱めを受けるよりはと「佐々木ケ池」に身投げした池と伝えられています。

○実相寺（一戸町）



当初二戸市金田一にあった「実相寺」は、九戸氏の庇護を受けていましたが、同じく帰依していた一戸城主の一戸政連（まさつら）の勧めで天正2年（1574）一戸に移転しました。そのことに激怒した政実が領民の参拝を禁じるとともに、これまで与えていた仏飯料も取り上げたと伝えられています。

これは、政実の父信仲の代に、一戸氏のお膝元である姉帯・根反に城を築いたことにより、九戸氏と一戸氏との間で不和が生じていたことが背景にあると考えられています。

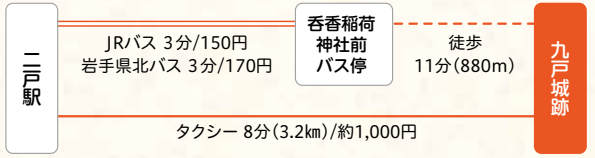
［政実ゆかりの地へのアクセス］

新幹線二戸駅やIGRいわて銀河鉄道の各駅を起点として徒歩、バスで行くことができる場所もあります。

連絡先：一般社団法人二戸市観光ツーリズム協会

【TEL】0195-23-3641【FAX】050-3397-1568





バス

JRバス東北（株）二戸支店	☎0570-000-448
岩手県北バス一戸営業所	☎0195-33-2231

タクシー

［二戸市］

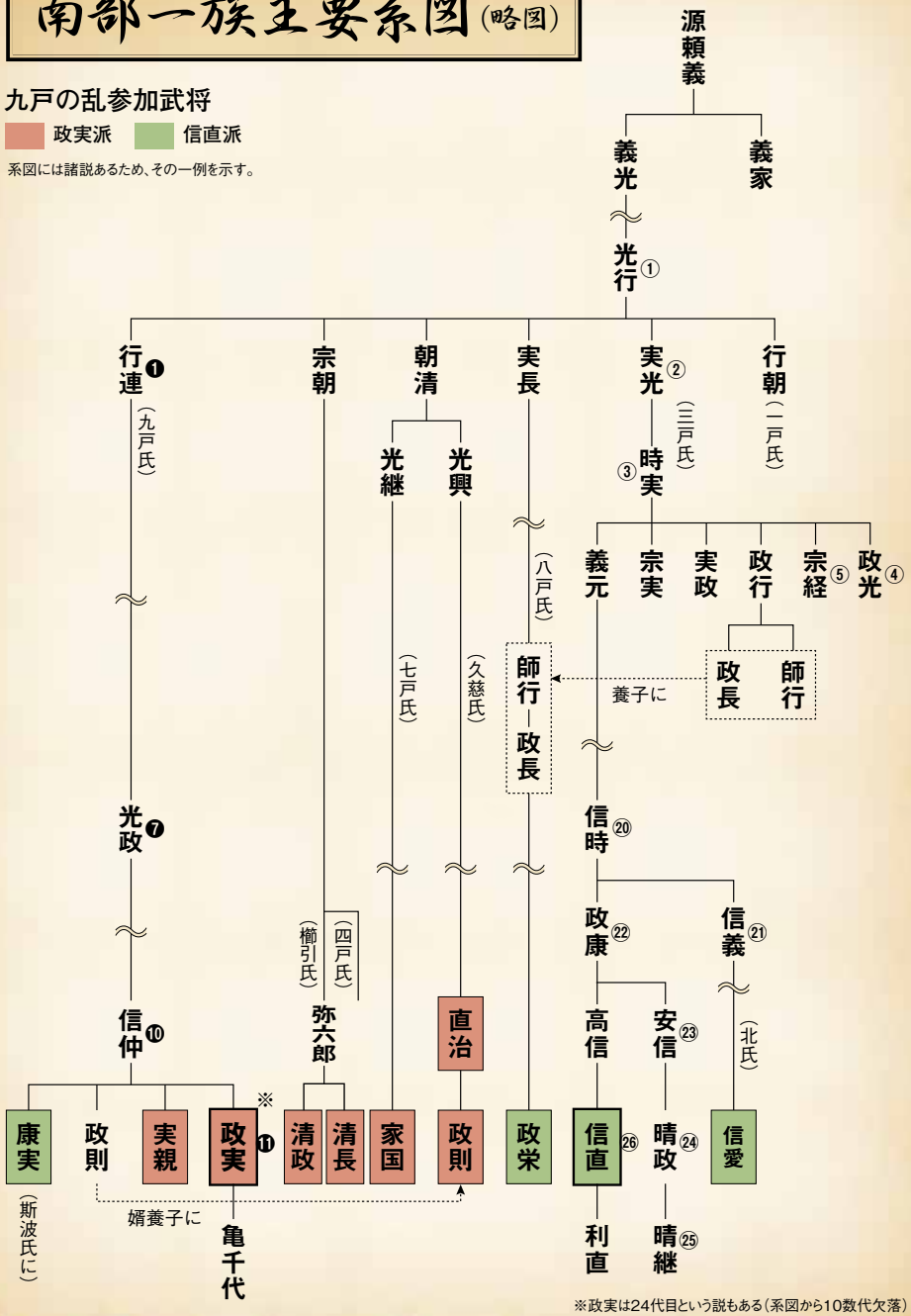
玉川観光タクシー	0120-23-2121
福岡タクシー	0120-23-3161
カシオペアタクシー	☎0195-22-5505
浄法寺タクシー	☎0195-38-2233

南部一族主要系図（略図）

九戸の乱参加武将

政実派　信直派

系図には諸説あるため、その一例を示す。



※政実は24代目という説もある（系図から10数代欠落）

九戸氏関連略年表

年号（西暦）	事　　項
明応 2 年 （1493）	当時金田一にあった実相寺の由緒書に、領主の九戸氏から土地を寄進された旨の記載（この頃二戸に進出か）
天文 5 年 （1536）	九戸政実誕生
天文15年 （1546）	南部信直誕生
永禄 6 年 （1563）	室町幕府が作成した全国の武将名簿「光源院殿（足利義輝）御代当参衆並足軽以下衆覚」に南部晴政と並んで「九戸五郎」の名がみえる
同13年 （1570）	南部晴政に男児鶴千代（晴継）誕生。世継ぎをめぐって晴政と信直が対立
天正元年 （1573）	（7月室町幕府滅亡）
同10年 （1582）	1月　南部晴政死去。世子晴継、跡を継ぐが同月24日急逝 信直、北信愛の支援の下、九戸氏等の反対を押し切り南部宗家の当主となる （6月本能寺の変、織田信長死去）
同13年 （1585）	（7月豊臣秀吉関白に）
同15年 （1587）	秀吉、奥羽の諸大名に惣無事令伝達
同18年 （1590）	7月　秀吉小田原城攻略、奥州仕置軍進発。葛西氏、大崎氏等滅亡 南部信直、秀吉から「南部内七郡」安堵の朱印状を受ける
同19年 （1591）	1月　九戸政実、三戸城での正月賀宴に不参 3月　九戸政実と南部信直の戦闘激化 九戸勢、一戸城、伝法寺城、苫米地城等を攻撃。信直、秀吉に援軍を要請 7月　奥州再仕置発令 9月 1日 討伐軍、九戸勢の諸城（姉帯城、根反城等）を攻撃、落城 2日 討伐軍、九戸城を包囲 4日 九戸政実以下8名の諸将、和議を受入れ投降 20日 九戸政実以下8名の諸将、栗原郡三ノ迫で斬首 蒲生氏郷、九戸城を改修し、南部信直に交付

北いわて・お城コンシェルジュ

久保井朝美さんが語る北いわての城の魅力



久保井 朝美 さん
北いわて・お城コンシェルジュ
城好き気象予報士

初めて訪れた北いわてのお城は、九戸城でした。まず驚くのが、二の丸の切岸！十和田火山の噴出物が積もった台地を活かした、土の絶壁です。そして、本丸には上部が波状に見える石垣がありますが、これはお城を壊した痕跡（破城跡）で、歴史の証人です。個人的に「石垣のビッグウエーブ」と呼んでいます。土も石も楽しい名城です。

また、久慈城は戦国時代の山城を体感でき、四戸城は大きな堀や巨石が印象的です。九戸一揆におけるお城の関係性などを考えながら、複数のお城をめぐってみてください。

そして、季節ごとに異なる表情を見られることも魅力です。九戸城は桜の名所で、白銀の世界も美しく、紅葉の久慈城はとても鮮やかですよ。

さらに、地元の食とお酒もお忘れなく。各所で地元の方々の温かさにも触れ、お腹も心も満たされます。

秀吉天下統一最後の相手

九戸政実ゆかりの地を巡る

九戸政実ガイドブック

発　行　日	平成27年2月	第1刷発行
	令和8年11月	第9刷発行
編集／発行	九戸政実プロジェクト	
制 作 協 力	二戸歴史民俗資料館館長	関　　豊 氏
	二戸市史編さん室	

［ お問い合わせ ］

事務局：二戸地区商工観光推進協議会
（岩手県県北広域振興局　二戸地域振興センター）

〒028-6103 二戸市石切所字荷渡6-3
［TEL］0195-23-9205　［FAX］0195-25-4062　［E-Mail］BL0001@pref.iwate.jp

二戸地域振興センターホームページ ▶ https://www.pref.iwate.jp/kenpoku/nino_chiiki/index.html